

琉球大学学術リポジトリ

考古学における地域志向取り組みの実践 ーコロナ禍における考古学教育の一例ー

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学国際地域創造学部地域文化科学プログラム 公開日: 2022-04-14 キーワード (Ja): 遺跡と地域, コロナ禍における大学教育, 人材育成, 実地調査 (巡検) キーワード (En): 作成者: 主税, 英徳, 後藤, 雅彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002017909

[報 告]

**考古学における地域志向取り組みの実践
—コロナ禍における考古学教育の一例—**

主 税 英 徳 ・ 後 藤 雅 彦
(琉球大学国際地域創造学部)

**Practical Examples of Community Oriented Initiatives in Archaeology
:An Example of Archaeological Education in the Corona Disaster**

Hidenori CHIKARA ・ Masahiko GOTO
(Faculty of Global and Regional Studies, University of the Ryukyus)

要 旨

本報告は、地域に貢献する人材の育成を目的とした考古学関係授業の取り組みを紹介するものである。また、コロナ禍において、仲間とともに遺跡を実地調査（巡検の意味を含む、以下、「実地調査」と表現する）を行うことで、考古学専攻生が何を学び考えたかについても報告する。

本取り組みでは、読谷村・恩納村をフィールドとして、学生主体で、遺跡の概要や見学スケジュールなどを調べ、実際に現地へ赴き、かつ、遺跡保護に携わる文化財専門員の方と情報交換などを実施した。その結果、参加した学生たちは、遺跡と地域の関係や博物館をはじめとする文化財の普及啓発のあり方、現地でしかわからない遺跡の情報など、実地調査を行うことで得る学びを習得することができた。新型コロナウイルスの影響により対面でのコミュニケーションが難しい現在、考古学教育において、遺物・遺構の実測や発掘調査などの技術的方法だけではなく、「遺跡を現地で知る」機会を与えることも、今後の文化財保護を担う人材を育成するにあたっては必要であることを再認識することができた。

キーワード：遺跡と地域、コロナ禍における大学教育、人材育成、実地調査（巡検）

はじめに

新型コロナウイルス感染状況がまだ落ち着かない。感染ピークが治まったかと思うと、またピークが訪れるといった波が何回も襲ってきている。コロナ禍において、「対面」を基本とする教育の実施が非常に難しい状況にある。特に、考古学の分野においては、専門的知識や技術の習得には、対面でのコミュニケーションが欠かせない。しかし、感染防止の観点より、対面を極力避けなければならない。そのため、各大学と同様、琉球大学の考古学ゼミにおいても、Zoomを使用した授業を実施するなど、工夫を凝らしている。

このような状況下で、2021年12月に本年度初の実地調査を実施した。本稿では、地域に貢献する人材の育成を目的とした、地域志向取り組みにおける考古学授業の実践例を報告する。

あわせて、コロナ禍における考古学教育の一例の報告としても位置づけることとしたい。新型コロナウイルスまん延により、人と接することが困難な状況である。そのようななか、各大学の考古学教育においても、講義、実習、演習などを実施するにあたり、様々な工夫を凝らし、知識・技術の伝授に挑んでいる（辻田 2021 など）。今、コロナ禍における大学教育を報告することについて、その意義や必要性を見いだすことは簡単ではないとしながらも、途中経過として何らかの記録を残す必要性はそれなりにあるのではないかという指摘もある（水ノ江 2021）。筆者らもこの趣旨に賛同し、本稿では、コロナ禍の考古学教育のうち、一人ではなく、教員や仲間とともに現地で「遺跡」を捉えることにより、考古学専攻生がいかに考え、どのように感じたかについて記録することも目的としたい。

1. 取り組みについて

本取り組みは、2021年度琉球大学の「地域志向活動トライアル経費による正課科目における地域志向取組」の支援を得て実施した成果の一部である。実施要項によると、その目的とねらいは、「本取組は、「地域志向教育」をより拡充・強化し、推進するため、本学で開講される正規の授業を対象に、その改善取組を募集し、優れた取組に対して経費を支援するものである。これにより、本学の基本理念の一つである「地域に貢献する大学」、すなわち、地域に対して積極的に関与し、地域に貢献する人材を育成する大学として、社会貢献の責務を果たすことを目指す。」ということである。

これに基づき、考古学実習にあたる「考古学研究方法論Ⅰ・Ⅱ」の科目を対象に申請を行い、採択された。取り組みの趣旨は、「遺跡の保存と活用」をテーマに、現在取り組んでいる人々と情報交換を行うことにより、専門性・問題解決能力を有した人材の育成を目標とするものである。読谷村と恩納村、大宜味村と名護市の大きく2つのフィールドを対象として、それぞれ12月と3月に実施した。

このうち、本報告では、読谷村と恩納村を対象として、学生が主体となり、遺跡を事前に調べ、実地調査を行うとともに、現地で遺跡保護に取り組む専門員の方と情報交換を行った状況、そして最終的に学生たちが何を学んだかなどについて報告する。

2. 実地調査

(1) 実施体制

遺跡の事前調べから、実地調査、事後の情報共有・再確認の取り組みに参加した学生は、上記「考古学研究方法論Ⅰ・Ⅱ」を履修している学部2・3年次、加えてティーチングアシスタント（以下、TAと略称する）の院生である。参加メンバーは、次のとおりである。

学部3年次 川中和樹、安里正敬、仲程祐輝、諸見里結衣、高良未来、伊佐真怜、玉城佳奈、松瀬彩、菰田快人

学部2年次 畑中爽甫、小川泰盛、花城媛子

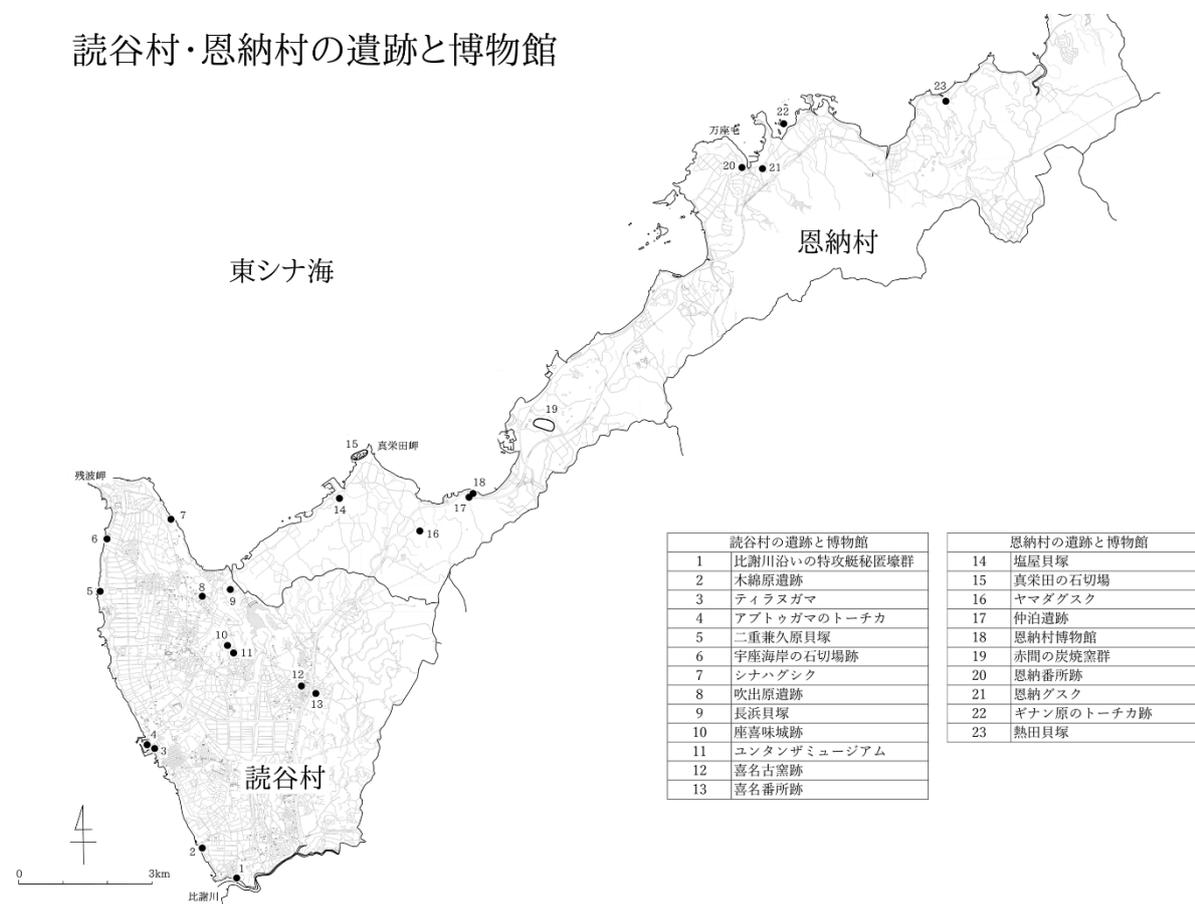
修士1年（TA）糸数葉菜

(2) 実施状況

①計画

読谷村と恩納村において、見学を希望する遺跡と行程、タイムスケジュール、地図などについて、学生が主体となって立案した（第1図）。遺跡は、両村を対象として、「先史時代」「グスク」「戦争遺跡」の大きく3つのカテゴリーを設定させるようにすることにより、両地域の遺跡を比較できるように工夫させた。各遺跡について、学生2名で1グループを構成し、地理的環境や歴史的背景、調査経緯を含む概要などを村史や調査報告書などをもとに調べ、まとめた。その成果を巡検前に発表してもらい、情報共有も図った。発表にあたっては、新型コロナウイルス感染状況を鑑みて、Zoomにて実施した。

②実地調査（巡検）



第1図 読谷村・恩納村の遺跡と博物館（電子地形図（国土地理院）を加工して作成）

2021年12月18日（土）に実地調査を実施した。各遺跡の概要や状況写真などは、以下のとおりである。A～Fが読谷村、G～Kは恩納村に所在する。このうち、時間の都合上や駐車スペースの関係上などから、直接見ることができなかった遺跡もあるが、各村の博物館で、展示を通して確認することができた。また、現地では、各々の遺跡を調べた学生が解説を行った。

掲載した遺跡概要は、各学生がまとめた成果を参考にした。担当学生は遺跡名の後に（ ）で

表記している。

【読谷村】

A 木綿原遺跡（安里・諸見里）

木綿原遺跡は、沖縄の貝塚時代前期から後期の遺跡である。墓地を中心とする遺跡で、沖縄で初めて先史時代の箱式石棺墓が発見されたことから 1978 年に国の史跡に指定されている。九州などで作られた弥生時代の土器が多数出土していることから、九州地方との交流が考えられている。また人骨も出土している（読谷村教育委員会 1978）。



写真 1 木綿原遺跡巡検状況

B 座喜味城跡（小川・仲程）

座喜味城は、15 世紀の初頭、築城家としても名高い読谷山按司護佐丸によって築かれたといわれる。戦時中は、日本軍の砲兵陣地に使われ、戦後は米軍の通信基地として利用された。座喜味城跡は 1956 年に琉球政府の重要文化財に指定され、日本復帰の 1972 年には国指定史跡となる。翌年の 1973 年から 1985 年の間、文化庁・沖縄県の補助を受けて城跡の発掘調査や城壁修理が進められた（読谷村教育委員会 1986）。2000 年 12 月 2 日には村民待望の「琉球王国のグスク及び関連遺産群」のひとつとして世界遺産に登録された。



写真 2 座喜味城跡巡検状況

C 喜名古窯跡（川中・松瀬）

喜名焼は、沖縄を代表する古窯の一つであり、硬く焼き締められた荒焼が多く発見されている。現在までに発見されている窯体は、湧田窯跡、壺屋窯跡、喜名古窯跡の3遺跡であり、近世琉球窯業史において調査、分析対象となる重要な遺跡である。

3基の窯体と左右に物原が出土している。窯体は、主に荒焼に用いられたとされる単室登り窯である。焼成部の調査のみとなっているが、1号窯ではアーチ状の天井が残っている（仲宗根 2005）。

D 宇座海岸の石切場跡（菰田・畑中）

読谷村の西海岸には宇座の残波岬一帯から渡慶次・儀間・高志保・波平・楚辺海岸まで広い面積の石切場跡がある。海岸での石切産業は大正時代末期頃から始められ、コンクリートブロックやセメントが普及する昭和時代前期までおこなわれていた。宇座海岸のものは特に良質なものとして「宇座石」と呼ばれていたようである。干潮時にはシチと呼ばれる鉄製道具で切り出し作業をおこない、切り出した重たい石は満潮時に海水の浮力を利用して馬車に積んだ。切り出された石は家の堀やひんぷんと呼ばれる玄関の目隠し状の堀などに使われた（世界遺産座喜味城跡ユンタンザミュージアム）。

E 比謝川沿いの特攻艇秘匿壕群（高良・花城）

特攻艇秘匿壕とは、小型船舶で敵艦に体当たりによる攻撃を行う特攻艇を収容し秘匿するとともに、砲撃から守ることを目的に構築された壕である。特攻艇は自走できず、さらに特攻艇自体が秘密兵器であったため、秘匿する必要があった。そのため海岸に面した丘陵に掘り込まれ、直接海岸から見えにくい位置にあるものや、偽装したものが多い。壕の形態は、長さ約 10～20 m、幅約 2 m、高さ約 2 m の直線的な壕となっている（沖縄県立埋蔵文化財センター2015）。また、一定の間隔を空けて数基構築されるものや、複数が連結するものもある。

F アブトゥガマのトーチカ

沖縄県読谷村の都屋漁港南端の標高 3mのところの所に所在する。漁港通路で切り離された都屋漁港中央部突出の石灰岩台地には、かつて一帯は「アミフシモー（網干し毛）」と呼ばれる広場となっていて、その下をくりぬいて作られたのがこのトーチカである。トーチカからは北西と南東の方向を見ることができる（沖縄県立埋蔵文化財センター2002）。

【恩納村】

G 仲泊遺跡（安里・諸見里）

史跡指定にされている第二貝塚、第三貝塚、第四貝塚、第五貝塚、第一洞があり、史跡指定外の第一貝塚がある。第三貝塚からは岩陰住居跡、第四貝塚から石敷遺構、第一洞からは敷石遺構が確認されている。また、第二貝塚からは県内で初めて佐賀県腰岳産の黒曜石が出土した。

1975年沖縄国際海洋博覧会開催に伴う国道58号道路の拡幅工事のための緊急発掘調査によ



写真3 仲泊遺跡巡検状況

り 県内初の岩陰住居跡が発見されたことから、地域住民をはじめ県民の多数が仲泊遺跡の保存を要請し、比屋根坂石畳道もあわせて国指定史跡として活用保存されることになった(崎原 2020b)。

H 山田グスク (小川・仲程)

琉球石灰岩丘陵上に形成されており、石積の郭は北側に舌状に伸びた端部に位置し、標高が約 90m である。本遺跡の規模は東西に約 30m、南北に 160m と小規模のグスクである (當眞 2012)。

帕尼芝による北山城攻略に伴い、その一族の某兄弟は南方に逃れ、その弟が山田グスクの城主となる。3 代目城主が護佐丸である。その当時、佐敷小按司尚巴志が武寧を攻滅して中山 (浦添グスクあるいは首里グスク) に拠っていたが、尚巴志は三山統一を目論んで北山の侵攻を開始し、護佐丸が北山討伐に従軍した。その後中山への守りを一層強固にするために居城を山田グスクから座喜味城 (読谷村) へと移ることになる。その際に、石垣を山田グスクから座喜味城へと移したとされる (恩納村教育委員会 2013)。

I 赤間の炭焼窯 (川中・松瀬)

沖縄県教育委員会が実施した生産遺跡分布調査で報告された炭焼窯群である (沖縄県 1995)。標高 25 ~100m ほどの丘陵斜面に位置する。沖縄科学技術大学院大学建設の際の調査では、沖縄県立埋蔵文化財センターにより 34 基の炭焼窯が確認され、うち 5 基について、発掘調査が実施された。これらの炭焼窯は、すべて築窯製炭遺構で近世以降もしくは近代以降の遺構であると考えられる (崎原 2020a)。

J 真栄田の石切場 (菰田・畑中)

真栄田岬より南西海岸に広がる石切場跡で、広範囲に石切の跡が確認されている。採石してそのままのものもあることから、現地で切り出したとされる。現在の真栄田集落内の民家にもここで採掘されたと考えられる石が屋敷囲いの塀に利用されている (崎原 2012)。

採取方法は切りたい大きさにカニガラと呼ぶ鉄の棒で切り、側面に楔を打ち、カニガラを差し込んで割り取ったとされる (沖縄県埋蔵文化財センター 2019)。

K ギナン原のトーチカ

琉球石灰岩の岩盤と転石との間にできた地形と空間を利用している。内面に板材で型枠を造り、南東側に石とセメントで壁を作って塞ぎ、銃眼を 2 つ、入り口を 1 箇所作っている。内部には島の北側に抜けるための空間があり、トーチカの背後へ登れるようになっている。内部は 3 畳ほどの広さがあり、天井は銃眼のある前面部分にコンクリートを使用して整形しているが、それ以外の部分は土と草木で塞いでいる。海岸線の防備としては二つの銃眼が国道 58 号線に向けており、海上を向いておらず不自然で、その利用目的は不明である。弾痕、破損跡が見られないことから、実際には使われなかった可能性がある (崎原 2020c)。

③情報交換

仲泊遺跡見学後、恩納村博物館にて、恩納村の文化財専門職員である崎原恒寿氏と情報交換を実施した。崎原氏は、琉球大学考古学研究室の卒業生でもある。

恩納村における各遺跡や文化財保護行政、遺物・遺跡を活用した教育普及活動など、考古学や文化財全般について講話をしていただいた。そのなかで、大学で学んだ考古学がどのように活かされているかも説明をいただいた。

加えて、山田グスクから出土した実物資料を目の前に、遺物の解説をしていただいた後、山田グスクの発掘調査現場や周辺の文化遺産などについても見学させていただいた。



写真4 崎原氏との情報交換状況



写真5 山田グスク出土遺物と現地での解説状況

④実地調査後の情報共有

実地調査に諸事情により参加できない学生がいた。これに加え、現地で得た情報の共有と確認を目的として、巡検後の授業において、写真をもとに振り返りも行った。実施する時期に、新型コロナウイルス感染が再燃したため、この授業についても Zoom を活用して行った。方法としては、見学した写真を共有しながら、遺跡の概要や見学後の感想などを各学生より発表してもらった。

その後、学生たちに「考古学研究方法論Ⅰ・Ⅱ実地調査成果シート」を作成してもらうこととした。今回の実地調査（巡検）を通して、各自が何を学んだかを整理することを目的としたものである。

3. 実地調査成果シート

本シートにおいて、実地調査の感想として、以下の2点について問うこととした。以下、参加した学生たちが、本取り組みを通して考えたことや感じたことなどについて、一部抜粋して掲載する。

(1) 実地調査を通して、「地域における遺跡の保存と活用」や「地域と文化財の関わり方」などについて、どのように考えるか、記述してください。

- ・地域において遺跡を保存・活用するためには、地域住民との連携が重要であると思う。仲泊遺跡は保存のために国道を曲げてつくった。このことは、遺跡の保存活用における地域住民の協力の重要性を示しているように思う。また、地域住民のみならず、様々な人と交流することが重要であると思った。遺跡を知識がなくとも理解しやすい形で示すとともに、遺跡の重要性を周知する必要があると思う。博物館の展示や講演会、本の出版など様々な形態で、地域の遺跡の重要性を示すことが、これからの遺跡の保存活用にとって良いのではないかと考えた。
- ・社会の変化に合わせて、遺跡の保存活用の仕方にも変わっていく可能性がある。しかし、地域との連携が重要であるということは、これからもそう変わらないのではないかと考えた。巡検を通し、遺跡を扱う立場に立った時、独りよがりにならずに、周りとの話し合いや協力を忘れないようにするべきなのではないかと考えた。
- ・地域における遺跡の保存と活用には地域住民の理解と協力が必要だと思った。地域住民の理解と協力を得るためには、まずは地域にある遺跡の存在や価値について知ってもらうことが大切だと思った。また、地域住民に単に遺跡の存在を知ってもらうだけではなく、その価値を理解してもらうことで、自分が住む地域には遺跡があるということを誇らしく思ってもらえるのではないかと考えた。
- ・地域の人々にとって地域にある文化財や遺跡は、誇りや自信につながるものだと考えるのでそれを保存や活用する側が意識して発信していかないといけないと感じた。それには遺跡の保存活用にはその地域の人々がその遺跡に対して重要性を感じたり、関係性を認識したりすることが必要だと考える。地元の人々に関心を持ってもらうためには、小中高と長年にわたって地元にある遺跡や文化財についての授業をして見学してもらうことが重要だと考える。授業で事前に情報を共有して、その情報を行って五感で得た情報と事前に共有した情報を合わせてもらうことが必要だと考える。そうすることで地域の文化財や遺跡について面白いと感じてもらえたり、重要性を理解してもらえたりして、遺跡や文化財の保存・活用に繋がると考える。
- ・文化財をその地域の一つのシンボルとして、そこを訪れる人の経済活動を促したり、認知度に貢献したりすることは、地域の人にとっても利益が生まれるので、観光客だけではなく、地域住民も遺跡に対して注目度を上げていけると考えた。文化財が一人歩きするのではなく、文化財が所在する地域全体での遺跡と住民相互の関わりというのが重要だと考えた。
- ・考古学において文化財は研究対象であるが、その一方で文化財は地域のものであり、地域住民の協力があってこそ維持、保存が行われ、活用されていくものであると考える。考古学は常にその助けになるように研究を行い、その文化財の価値を学問としての立場から立証し続

けなくてはならない。遺跡を残すという判断や記録保存とする判断においても、将来的に地元住民が地元を誇れるようにするという意識をもって判断するべきであると思う。

- ・博物館は、ただ歴史的に価値のあるものなどを展示するのではなく、地域のことを一番に考えて、展示や遺跡の保存活動、どのように遺跡を活用するのかなどを考えることが重要なのだと考えた。
- ・仲泊遺跡は、恩納村博物館や道の駅の近辺に所在していて、道の駅の求心力を支えに博物館や周辺の遺跡を訪れることで観光客や通行人が地域の歴史や民俗を学習できる構造になっている。実地調査の際には歴史の道を歩く人がしばしば見られ、歴史的な追体験を積極的に行う人々の様子を見ることができた。

(2) 特に印象に残った遺跡について、その理由とともに記述してください。

- ・木綿原遺跡が印象に残った。報告書に記載のあった、海の近くに立地しているということが実際に確認できたし、遺跡の周囲を歩いてみることで、ここに人が活動していたのだということを想像することができた。
- ・木綿原遺跡が印象に残った。実際に行ってみて海までの距離だったり、そこから来る風の強さだったりを感じてどのように生活していたのか分かった部分ともっと知りたい部分があった。実際に見たり、歩いたりすることで当時の人々の生活・考えを追体験できるような感覚になったので印象に残っている。
- ・仲泊遺跡が印象に残った理由は、人が住んでいた岩陰がどのような様子であるのか、海などの周辺の自然環境など、実際に遺跡を訪れてみないとわからなかったからである。また、国道の建設に当たって、地域住民が仲泊遺跡の保護運動を行ったことが仲泊遺跡の保護につながった一因だと知り、地域住民の地域の文化財保護に対する思いが感じられた。
- ・仲泊遺跡をよけて湾曲させた道路によりできたスペースに道の駅や博物館、図書館が作られ、観光客や住民にとって親しまれる場所として活用されているという背景が印象的であった
- ・山田グスクが印象に残った理由は、発掘の様子を初めて実際に見たからである。発掘する際に、遺跡内部の位置関係や城壁のつながりから遺物や遺構が出土する場所を推測して発掘することがわかり、勉強になった。
- ・山田グスクは景色が良く、周辺が一望でき、軍事的に考えられて選ばれたことが理解できたし、実際に登っていくのは大変だったが、かつて人がここを登り、活動していたことを実感でき、貴重な体験ができた。
- ・山田グスクは海が一望することができ、他地域から船が来たときにすぐにモノの交易や敵へ

の対応ができるようにこの立地にしたと考えられることを知り興味深く感じた。

- ・博物館も印象に残った。読谷村、恩納村ともに専門知識がなくとも理解できるように工夫されていて、人に分かりやすく伝えることの重要性を再確認し、研究成果を周知することの大切さも学ぶことができた。

4. 本取り組みの成果

本取り組みの目標は、「地域に対して積極的に関与し、地域に貢献する人材を育成する」ことである。実地調査成果シートでの学生の感想をみる限り、その目標に近づけたのではないかと考える。なぜなら、考古学を学ぶにあたって、礎となる「遺跡」に対する理解を深めることができたためである。学生たちの感想から地域住民の方々の理解や関心があつてこそ遺跡が活用されるということ、遺跡に直接、足を運び現地を見ることで感じることもあることなどを学んだことである。

遺跡の多くは、開発がきっかけとなり、発見・調査され、記録保存後は破壊されてしまい、住民の方々の記憶からも薄れていくことが多い。一方、現地保存されても、地域住民の方々の活動なくしては、遺跡の活用にはつながらない。記録保存されているか、されていないか、いずれにしる、遺跡を将来に伝えていくために、地域住民の方々の理解と関心が不可欠である。

専門的人材を育成するにあたっては、考古学に関する調査研究はもちろんのことだが、「遺跡の活用」についても考える機会を提供することは、これからの考古学教育において重要な要素の一つになる。

もちろん、調査研究においても「遺跡」は重要である。研究を行うにあたり、必ず遺跡発掘調査報告書の成果を参考にする。当たり前のことではあるが、報告書を読むだけでなく、実際に遺跡のある現地に行くことも重要である。なぜなら、遺跡当時の環境と大きな変化はあるものの、他の遺跡との位置関係や立地状況などを直に感じるができるためである。

最後に、コロナ禍における大学教育という視点から本取り組みの成果について整理したい。

新型コロナウイルスの影響により対面でのコミュニケーションが難しい現在、多くの大学における考古学教育も様々な面で困難な状況にある。考古学教育では、講義や演習などを通じた専門的知識や、遺物・遺構の実測や発掘調査、機器の扱い方などの技術の習得などが必須である。これらの習得にあたっては、これまでは対面が基本であったが、現在、それが難しい。少しでも教育の質を落とさないようにと、各大学において、オンライン授業や各大学のWeb上での学習支援システムなどを活用し、様々な工夫を凝らし、この苦境を乗り越えようとしている。

本取り組みを通して、今、考古学を学ぶにあたっては、専門的知識や技術の習得に加え、「遺跡を現地で知る」機会を与えたり、現地に行くことを促したりすることも必要ではないかと感じた。新型コロナウイルスの影響により、人との接触が制限されている現在、大学での学習が「机上」、すなわちパソコンと向き合うことが大学での学びの基本となってしまっている。この影響は、少なからず考古学にも及んでいる可能性が高く、学生自身が「遺跡」現地に行くことに必要性を考える機会を失っているかもしれない。コロナ禍である今だからこそ、改めて机上だけの研究にならないように促していく必要がある。

おわりに

以上、地域志向の人材育成、さらには、コロナ禍における考古学の大学教育の両面からみて、

本取り組みは有意義であったと考える。仲間とともに遺跡に行き、議論し、かつ現地で携わる専門員と情報交換し、「遺跡」から多くのことを教わることを知ってくれたためである。

感染に怯えることなく、いつでも議論したり、泊まり込みで調査したりと、「人と人がつながる」本来の考古学教育の姿に戻れるように、一刻も早くコロナ禍が終息することを願うばかりである。

本取り組みに実施するにあたって、上地克哉氏（読谷村教育委員会）、崎原恒寿氏（恩納村教育委員会）、寄合龍己氏（大宜味村教育委員会）、横手伸太郎氏（名護市教育委員会）、読谷村教育委員会、世界遺産座喜味城跡コンタンザミュージアム、「道の駅」喜名番所には、多大なるご協力をいただきました。末筆ながら、心より感謝申し上げます。



写真6 実地調査に参加した学生たち
(座喜味城跡にて)

参考文献

- 沖縄県教育委員会編 1995 『生産遺跡分布調査（Ⅰ）県内生産遺跡分布調査報告書』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター2002 「都屋・楚辺海岸沿いのトーチカ」『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅱ）－中部編－』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター2015 「読谷村比謝川沿いの特攻艇秘匿壕跡群」『沖縄県の戦争遺跡－平成 22～26年度戦争遺跡詳細確認調査報告書－』
- 沖縄県埋蔵文化財センター2019 『掘り出された戦前の沖縄』
- 恩納村教育委員会 2013 『山田グスク遺構確認調査報告書』
- 恩納村史編さん委員会 2020 『恩納村史』第2巻 考古編
- 崎原恒寿 2012 「恩納村の潮間帯遺跡－村内の沿岸地域遺跡と生産遺跡について－」『恩納村博物館紀要』第7号 恩納村博物館
- 崎原恒寿 2020a 「10. 赤間の炭焼窯群 第7章 南恩納の遺跡 第4部 恩納村の遺跡（資料編）」『恩納村史』第二巻考古編 恩納村史編さん委員会
- 崎原恒寿 2020b 「1. 仲泊遺跡 第11章 仲泊の遺跡 第4部 恩納村の遺跡（資料編）」『恩納村史』第2巻考古編 恩納村編さん委員会
- 崎原恒寿 2020c 「9. ギナン原のトーチカ跡 第16章 恩納村の戦争遺跡 第4部 恩納村の遺跡（資料編）」『恩納村史』第2巻 考古編 恩納村史編さん委員会
- 世界遺産座喜味城跡コンタンザミュージアム “読谷村西海岸の石切場跡” TSUNAGARY-MAP 読谷村の文化財と戦跡マップ <https://www.tsunagaru-map.com/bunkazaisenseki/map.html?point=2619> (参照 2022.03.12)
- 辻田淳一郎 2021 「コロナ禍における大学の考古学教育」『季刊考古学』第153号 雄山閣
- 眞嗣一 2012 『琉球グスク研究』琉球書房
- 仲宗根求 2005 「喜名古窯跡の発掘調査概要」『やちむん』第14号 読谷村立歴史民俗資料館 19
- 水ノ江和同 2021 「巻頭言 現状レポート第1回コロナ禍と考古学研究・埋蔵文化財保護－その進むべき方向性の模索」『季刊考古学』第153号 雄山閣
- 読谷村教育委員会 1978 『読谷村文化財調査報告書第5集 木綿原－沖縄県読谷村渡具知木綿原遺跡発掘調査報告書－』沖縄県読谷村教育委員会
- 読谷村教育委員会 1986 「国指定史跡座喜味城跡」『環境整備事業報告書（Ⅱ）』